

主 題：神による救いと人による救い2

聖書箇所：ローマ人への手紙 10章1-4節

私たちはこれまで、人が救われるためには「神の選び」と「一人ひとりが義を得ること」の二つが不可欠であることを見て来ました。義を得ること、つまり、救われるためには私たちは神が備えてくださった救いの手段を受け入れなければなりません。「信仰によって救われること」、それが神の備えてくださった手段です。私たちはその手段を受け入れなければならないのです。当然のことです。人は神によって救われるからです。

すでに、私たちが見て来たように、このローマ9章で、義の律法を求めたイスラエルはその求めた義を得ることがなかった、却って、それを求めていなかった異邦人が得たとパウロは語っていました。つまり、異邦人は全く何も知らなかったけれども、神の救いのメッセージを聞いたときに、彼らは喜んでそれを受け入れたのです。ところが、イスラエルはそうではありませんでした。彼らには大きな問題がありました。もちろん、これはすべてのイスラエル人、ユダヤ人のことではありません。義を与えてくださる、つまり、救いを与えてくださる神の教えに耳を傾けようとせず、自分の方法、自分の考えで救いを得ようとする人たちすべてに言えることです。ですから、パウロが言ったように「**彼らは、つまずきの石につまずいたのです。**」（ローマ9：32）。神が備えた救いに彼らはつまずいたのです。なぜなら、それは自分たちが考えている救いを得る手段と違ったからです。

パウロは10章でも私たちに同じことを教えようとします。このイスラエルの人々の問題をさらに明らかにして行くのです。

☆パウロの教える救い

A. パウロの願い — イスラエル人の救い 1節

1節を見ると、パウロのイスラエルの人々、同胞たちに対する深い愛をもう一度知ることになります。「兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。」、このことは9章の初めにも出て来ました。パウロは自分の愛するイスラエル人が救いに与ることを、どれ程強く願っていたのか？そのことを見て取ることが出来ます。この「願い求めている」とは祈りのことです。ですから、パウロは本当にいつもイスラエルの人々のために祈っていた、彼らの救いをいつも覚えて祈っていたのです。

もちろん、パウロは異邦人に遣わされた使徒です。だから、異邦人の所に出て行って多くの異邦人にキリストの福音を伝え続けました。しかし、だからと言って、彼の同胞であるイスラエルの人々のことを見捨てた訳ではありません。心の中にはいつもイスラエルの人たちが救いに与るようと、そのことを願い祈っていたことが1節に記されているのです。皆さん、このような救いに関する熱意、真剣さは必要です。少なくとも、私たちは愛する者たちの救いのために祈るべきです。神のみこころが成されることを信じて祈ります。でも、多くの人たちはイエスの福音を語っても、余り反応がなかったり、また、逆に反対されたりすると希望を失います。「もう何年も祈って来ました。何回も話しました。でも、心を閉ざしています。あの人が救われるのは不可能です。」と、そのように決めつけるのは早すぎます。パウロは決めつけていません。パウロは神が働いて彼らを救いへと導かれることを信じて、彼らのために祈り続けました。なぜなら、パウロ自身、人間の目から見て絶対に救われない人々の中の一人だったからです。彼はこのように言っています。Iテモテ1：13「私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。」

彼がイエス・キリストを信じて救いに与った後、イエスの弟子たちのところに行ったとき、みなは彼を受け入れようとしませんでした。「彼はやって来て我々を捕まえようとしている。」とそのように思ったのです。こんな人物が救いに与るなんて信じられない、それが弟子たちの反応でした。人間的に見て「この人は救われないだろう、救いはこの人に及ばないだろう、無理だろう。」と思っても、神はみこころを成されます。ですから、もし、伝道の働きをされていてそのような失望感を抱いておられる方がおられるなら、もう一度思い出さなければいけません。私たちは祈り続け語り続けて行きます。私たちはそのことを、パウロのことばを見ることによって今一度思い起こされます。

パウロはイスラエルの人々に対する自分の思いを記した後、2節からまた、イスラエルの人々の問題へと話を進めて行きます。

B. イスラエル人の問題 — 神への不従順 2-3節

2-3節「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。:3 というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。」、パウロがここで言っているイスラエルの人々の一番大きな問題は何でしょう？中心的な動詞は「神の義に従わなかった」です。これが彼らの問題だったのです。その理由を二つ上げています。

◎イスラエルが神の義に従わなかった理由

1. 神の義を知らず

この「知らず」ということばは「無知である、知識を欠いている」という意味です。すなわち、パウロが言うことは、イスラエルの人々は神の義に関して、救いに関して無知だった、その知識が欠けていたということです。また、このように言っています。「その熱心は知識に基づくものではありません。」と、彼らも持っているという知識は正しい知識ではなかったのです。というのは、この「知識」ということばは、ギリシャ語では一般的に「グノーシス」ということばを使います。「グノーシス」とは「知識、理解、何かを知る」というときに使います。頻繁に使われています。でも、ここで使っているのは「グノーシス」ではなくて、「エピグノーシス」ということばです。新約聖書には20回しか出て来ないことばを使っているのです。

パウロが敢えてこのことばを使ったのは、彼らが神のことをある程度知っていたこと、律法が与えられていたこと、彼らはいろいろな機会に神のことについて学ぶ機会があったことから、神に対するある程度の知識は持っていたのですが、大切なことが欠けていたからです。ですから、パウロがここで「エピグノーシス」ということばを使うことによって、彼らには正確な知識が欠けていたということを言いたかったのです。「エピグノーシス」ということばはグノーシスよりも「より詳しく完全な知識、より詳しい知識、完全な知識」という意味です。ですから、彼らは確かに知っていたけれど、彼らの知識は完全ではなかった、彼らはこの神の義についての正しい教えを理解していなかったとパウロは言っているのです。

ですから、正しい知識、完全な知識をもっていなかったから、彼らの行動は不完全だったのです。欠けた知識によって彼らが行なったことは神の前に喜ばれるものではなかったのです。ここで言わんとしている神の義に関して、パウロはイスラエルの人たちが何を知らなかったと言っているのでしょうか？イスラエルの人たちが知らなかった「神の義に関する知識」とはどういうものなのでしょうか？それは、神の義、この救いは神からの贈り物だということです。イエス・キリストを信じておられる皆さんはそのことをご存じです。私たちが救いに与ったのは神の一方的なあわれみによります。「恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。…行ないによるものではありません。」（エペソ2：8-9）とあるように、これは神からの賜物、ギフトです。「神の義は神からの贈り物」なのです。信じる者に与えられるすばらしい神からのプレゼントです。

しかし、彼らはそのことを理解していなかったために、神がイエス・キリストの身代わりの死によって備えてくださったこの救いを、彼らは受け入れることをしなかつただけでなく、それを歓迎もしないで、そして、彼らはそれを拒んだのです。彼らはこのイエス・キリストによって罪人は真の神と和解することができるということ、神との関係を修復することができるということを分かっていたのです。だから、神が備えられたすばらしい救いを彼らは受け入れなかったのです。それが彼らが神の義に従わなかった一つ目の理由です。彼らは知識に欠けていたのです。

2. 自分自身の義を立てようとした

彼らは自分自身で自分の義を確立できると考えていました。それは律法を守ることによってです。ですから、彼らは律法を守ることに非常に熱心だったのです。そのことは2節の初めにあります。「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。」と、そして、パウロは続けて「しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。」と言います。確かに、彼らは熱心でした。パウロはそのことを自分も経験していたし、実際に目にしていたのでしょう。ですから、パウロは「あかしします。」と現在形を使っているのです。彼の周りにはそのような人たちがたくさんいたのでしょう。ここで「熱心」と訳されていることばですが、良い意味とそうでない意味とがあります。

◎熱心

(1) 悪い意味：別の箇所では「嫉妬、ねたみ」と訳されることばです。（詩篇69：9「それは、あなたの家を思う熱心が私を食い尽くし、あなたをそしる人々のそしりが、私に降りかかったからです。」 → ヨハネ2：17「弟子たちは、「あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす。」と書いてあるのを思い起こした。」）。使徒の働き5：17ではこのように訳されています。「そこで、大祭司とその仲間たち全部、すなわちサドカイ派の者はみな、ねたみに燃えて立ち上がり、」、この「ねたみ」ということばは「熱心」と同じことばです。ですから、ある箇所では「熱意」と訳され別の箇所では「ねたみ、嫉妬」と訳されるのです。

(2) 良い意味：熱心（ピリピ3：6「その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。」、ローマ10：2「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。」）。2節で「熱心」と訳されている通り、パウロが言いたかったことは、確かに、ユダヤ人たちはとても熱心に律法を守ろうとしている、半端なことではないということです。それはパウロ自身のあかしを通して知る事が出来ます。皆さんよくご存じのように、パウロがエルサレムで捕えられたとき、パウロが千人隊長に許可をもらって群衆たちに語る場面があります。千人隊長にはギリシャ語で語り、群衆にはヘブル語で語ります。そのことが使徒22：3にこのように書かれています。「私はキリキヤのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで私たちの先祖の律法について厳格な教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。」と、どのように熱心だったのか？続く4節「私はこの道を迫害し、男も女も縛って牢に投じ、死にまでも至らせたのです。」と、徹底的にイエス・キリストの教えに反対して来たと、そのように彼自身があかししています。

また、ピリピ3：5-6でもこのように言っています。「私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、：6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。」、確かに、パウロはユダヤ人の間で非常な尊敬を博していました。熱心だったからです。熱心にこの律法の教えを守ろうとしていたからです。もう一箇所、ガラテヤ人への手紙1：13-14で、かつての自分についてこのように言っています。「以前ユダヤ教徒であったころの私の行動は、あなたがたがすでに聞いているところです。私は激しく神の教会を迫害し、これを滅ぼそうとしました。：14 また私は、自分と同族で同年輩の多くの者たちに比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり、先祖からの伝承に人一倍熱心でした。」。

ですから、パウロ自身の証を聞いても、彼らは律法を守ることにおいてどれ程厳格であったか、熱心であったかが分かります。今でも、イスラエルに行くとき私たちは驚きます。今は何年なのか？本当に21世紀なのかと思ってしまうのです。なぜなら、彼らは2000年前の律法の教えを今も厳格に守り続けているからです。その背後には、自分たちの義を立てるためにこの律法を熱心に守り行なっていくなければならないと彼らが信じているからです。

ユダヤ人の熱心さはいろいろなところに記されています。その中の一つ、これは旧約の偽典ですが、聖典ではなく、旧約聖書でもなく、それらから除かれている外典と言われているものでもないもの、偽りの典ですから、これが本当だったかどうかよく分からないのですが、第4マカベア書というものがあって、その中にこのようなことが記されているとパークレーが紹介しています。ユダヤ人の熱心さについてです。大祭司エリアザルの話です。彼は紀元前2世紀ユダを支配していたシリアの王アンティオコス・エピファネスの前に連行されて来ました。このシリアの王は、ユダヤ人の宗教を根絶やしにすることを目的としていました。ですから、非常に厳しい迫害をもたらしたのです。このアンティオコスは大祭司エリアザルに豚肉を食べることを命令するのです。ご存じのようにユダヤ人は律法に基づいて豚肉は食べません。その命令に対して大祭司エリアザルはこう答えるのです。「アンティオコスよ、我々神の律法のもとに生きている者は、いかなる強制も我々の律法への服従以上に強力なものだとは考えません。」と、そう言ってその命令を拒絶します。また、彼は続けてこう言うのです。「いいえ、たとえ、あなたが私の目をえぐり取っても、私の腹わたを火で焼いても私は絶対に致しません。死ななければならないなら、父祖たちが(自分の先祖たちが)私を聖なる清き者として迎えてくださるであろうことを私は確信している。」と、そこで彼は王から命じられてむち打ちの刑を受けるのです。彼の肉はむちによって割け、血は流れ、腹は傷によってその傷口を広げた。彼は倒れても兵士たちから蹴られても、終わりに、兵士たちは彼を哀れに思い、豚肉ではない見せかけの肉をもって来てそれを食べるように勧め、そして、豚肉を食べたと弁明させようとした。しかし、彼はそれをも拒絶した。結局、彼は殺されるのです。彼は「私はあなたの律法のために激しい拷問によって死のうとしています。」と最後に神に祈ったとあります。律法を守るためにいのちを落とした。これがユダヤ人なのです。

彼らはここまで厳格に神の教えに対して絶対的に服従しようとしたのです。このようなことを聞くと、パウロでなくても私たちは悲しく思います。彼らのその熱心は知識に基づくものではないからです。彼らは律法を守れば神の義を得ることができる、救いに与ることができると考えたのです。彼らは思ったのです。律法をしっかりと守れば神が喜んでくださると。でも、そこにあったのは、自分自身が経験する自己満足でしかありませんでした。神の満足を得ることはなかった、なぜなら、それは神のみこころに反することだったからです。彼らは確かに、神の義に関する知識をもっていないで、神が教えられたことは、救いはキリストによって与えられる、私たちの行ないによって与えられるのではないということです。

C. 救いはキリストによる 4 節

4 節に「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。」と続きます。彼らはこのことを見落としていたのです。このことを理解していなかったのです。ここに「終わらせた」という動詞が出て来ます。原文ではこのことばが文頭に出て来ます。それはパウロがそのことを一番強調したかったからです。「キリストが律法を終わらせられた」、実は、これが少し難しいのです。このことばのギリシャ語はここで訳されているように「終わらせた、終わる、終結」という意味をもつのですが、もう一つ「目的」という意味があるのです。ですから、ある人たちはこの 4 節は「イエスが律法の目的である」と言わんとしたのではないかと思います。

◎ 10 : 4 の意味について

1. イエスが律法の目的である

確かに、考えてみると、これは全く真理から外れているとは言えません。というのは、律法は人々に彼らが罪人であることを明らかにしました。ガラテヤ 3 : 11 には「ところが、律法によって神の前に義と認められる者が、だれもないということは明らかです。「義人は信仰によって生きる。」のだからです。」とある通りです。つまり、私たちは律法が与えられることによって神の基準を知りました。神が要求しているのを見ました。そして、私たちがすぐに気付くことは、私自身はその神の要求している基準からかけ離れている者である、つまり、罪人であるということに気付くのです。自分がいかに罪深い存在であるかということを知り、同時に、私たちは自分の努力ではその神の律法が要求していることを満たすことができない存在であることに気付きます。神が「正しくありなさい」と言われたとき、正しくない自分に気付くし、正しくありましようとして努力しても、私たちは完璧に神の前に正しくあることはできない。私たちはその命令を 100% 守れないことに気付きます。それに気付くとき、あることがはっきりします。それは、私たちがどんなに頑張っても、私たちの努力によって神の救いを得ることは不可能だということです。人は救いに関する希望がないことを確信するのです。そのことに気付いた私たちは、神の前にあわれみを求めます。それが律法の働きです。

ですから、確かに律法を見る時に、私たちの罪深さが示され、自分で神の要求されている基準に到達出来ない、救いにおいては希望のない絶望の中にいる者だということが明らかになり、そして、私たちは神にあわれみを求めるのです。私たちの目は自分から神の方に向けます。確かに、律法はそのような働きをします。私たちがキリストの方に、神の救いの方へと向かわせてくれます。先ほど見たガラテヤ 3 : 24 にはこのように記されています。「こうして、律法は私たちがキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」、私たちがキリストに導くために、律法は私たちに私たちの本当に姿を示し、私たちに救いが必要だという、その必要性を悟らせてくれて、そして、救い主の方に目を向けさせると、確かに、そういう働きをします。ですから、ここで「イエスが律法の目的」と言っても、確かに、それはうなずけることです。

2. イエスが律法を終わらせた

もう一つの解釈は、今私たちが見ているように「律法を終わらせた」ということです。言い方を変えると、「イエスによってこれまでの生き方が変わる」ということです。というのは、これまでは自分自身の義を立てるために一生懸命律法の順守に努めて来ました。その人が主イエス・キリストの福音を聞いた時に、これまでの生き方を止めるということです。これまでの間違っただけの生き方がそれで終わるということです。なぜなら、これまでは一生懸命自分の行ないによって義をもらおう、義を自分のものにしようとして来たからです。しかし、キリストの福音を聞いた時に「これが神の備えてくれた救いだ」と言って、これまでやって来たこと、自分の義、救いを得るために律法を守り続けようとする生き方を止めて、神の備えてくださった救いに自分自身を委ねようとするのです。パウロはここでそのことを言わんとしたのです。

確かに 3 節を見ると、そこにはユダヤ人たちが律法を間違っただけで解釈していたことが分かります。「というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。」、彼らは律法によって救いを得ることができる、律法を守れると思っていたのです。彼らはそこにおいて誤った考えをもっていたのです。そこで 4 節で、パウロは、イエス・キリストを信じた人々がこれまでやって来たこと、自分自身の義を確立するために律法を用いて来た、そのような生き方を止める、そして、キリストに自らを委ねると、そのことを語ったのではないかと言うのです。

いずれにしても言えることはこういうことです。律法は私たちに救いをもたらすことはできません。私たちに救いが必要であることを悟らせてくれます。そして、私たちは神が備えてくださった完全な救い、完全な救い主イエス・キリストを信じる信仰によって、その神が約束された神の義をいただくのです。この神の律法はとても大切です。なぜなら、神の律法を見ると、神がどれ程聖い正しい方が分か

ります。同時に、律法によって私たちはさばかれます。なぜなら、神の基準が示されることによって、私たちがそれを犯して来たことがはっきりするからです。しかし、神の救いを獲得するための手段としての律法、それはもう終わったのです。それは不可能なのです。神の一方的なあわれみによって、イエス・キリストを信じる信仰によってのみ救いが与えられる、そのことをパウロはここで教えようとしているのです。

確かに、4節の後半に「信じる人はみな義と認められるのです。」とある通り、これが神のメッセージ、福音のメッセージです。これはすばらしいメッセージです。もし、この中にイエス・キリストを信じていない方がいるなら、そのあなたが覚えなければいけないことは、どんなに善行を積んでもあなたはあなた自身の力であなたを救うことは出来ないということです。あなたはどんなに頑張っても、神が要求している基準に達することはできません。ユダヤ人たちはみなそうして来ました。あなたよりも熱心にあなたよりもより厳格に…。しかし、パウロが言うこと、いや、神が言われることは「そこには救いはない。」です。救いはイエス・キリストを信じる信仰によってのみ与えられるのです。なぜなら、律法を完全に守られたイエス・キリストが、あなたの身代わりとなって、律法を破ったあなたの身代わりとなって、十字架に身代わりに死んでくださったからです。このイエス・キリストの身代わりによって、あなたにすばらしい救いが備えられたのです。イエス・キリストを信じる信仰があなたをその罪から解放するのです。

今日、私たちが見て来たところを今一度考えさせてくれるいろいろな話が聖書の中に出て来ます。最後にそのことを振り返って見て、今日のまとめをしましょう。

3. たとえ

(1) 金持ちの青年：マタイ 19：16-22

「：16 すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」：17 イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちにはいりたいと思うなら、戒めを守りなさい。」：18 彼は「どの戒めですか。」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。」：19 父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」：20 この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」この青年が考えていたことは「どんな良いことをしたら…」と行ないによって救いを得ることができるということでした。そして、「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」と、彼は自分自身の行ないによって天国に入れると思っていたのです。イエスはそうではないことをはっきりさせるためにこのように言われました。「：21 イエスは、彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」：22 ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。」と。

そこで皆さんに考えていただきたいことは、この二人の間でどのような話がなされたのかということです。イエスがこの青年に「あなたの持ち物のすべてを売り払ってわたしについて来なさい。」と言われたのは、一番大切な戒めをこのような形で語ったに過ぎないのです。一番大切な戒めは何かを覚えておられますか？それは「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」（マルコ 12：30）です。すべてのものよりも神を愛することでした。そのことを言われたのです。なぜなら、この青年は神を愛するよりも別のものを愛していたからです。神のメッセージは「何ものよりもわたしを愛するか？」です。青年は「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」と答えました。彼は一番大切な戒めを守っていなかったのです。そのことに気付いてもないのです。彼の熱心がいかに自分勝手なのかが分かります。熱心であっても、それはあくまで自分を満足させるだけのものです。果たして、それが神を満足させているかどうか？そのことを考えなければいけないのです。

(2) パイサイ人と取税人 ルカ 18：9-14

「：9 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。：10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。：11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。』」と、彼は自分自身が他の人たちと比べてどんなに善人であるかを主張しています。そして、「：12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』」、彼は神の前に喜ばれている、神の前に受け入れられているというその確信は何によって得たのでしょうか？このような行動です。私は悪いことをしていません、こんなに良いことをしていません、だから、私は神の前に受け入れられていると、彼はそのように信じて

いたのです。彼のことがそれを明らかにします。取税人はどうでしたか？「:13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、…」と、祈りの場に集まった人たちの中で彼は一番遠い所に立ち、そして「…目を天に向けようともせず、」、神が臨在しておられるというその場所を見上げることもしなかったのです。それだけ自分は神の前に立つに相応しくない存在であることを彼自身認識しているのです。「自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』」と。イエスはこのように言われました。

「:14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」。

皆さん、お分かりですね。これだけのことをしたから、私はこういう人間だから神は私をきっとあわれんで私を救ってくれて、私を天国に入れてくれるに違いないと言う人たち、結局、彼らがしていることは、自分自身の方法で天国に入ろうとするのです。自分の考えた方法で天国に行こうとするのです。そして、神が備えられた方法を拒むのです。見て来たように、この取税人は神の前に自分の愚かさを知って神の前にあわれみを求めました。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』と。彼は自分の行ないを誉めたのではありません。自分は悪いことをしていない、良いことをしているからと、そのようなことを自慢しようとしたのではありません。自分の罪深さを知って、神の前にただ救いを求めるのです。「神さま、私を救ってください。」と。その人が救われるのです。律法によって、私たちの行ないによって救いを得ることはないのです。すべては神の恵みなのです。私たちはそのことをしっかり覚えなければいけません。

特に、イエス・キリストを信じておられない皆さん、救いを備えてくれるのは神です。その方が示してくださったその方法でしかあなたの罪が赦される方法はありません。イエス・キリストだけがあなたを罪から救うことができるのです。その方の前に救いを求めて出て来ることです。「主よ、私をあわれんでください、私を赦してください、私を救ってください。」と。

イエス・キリストを信じておられる皆さん、ユダヤ人たちはすごかった。的外れでしたが主に対する熱心さはすごいものでした。そのことを少し考えて見てください。私たちの主に対する熱心さはどうなのでしょう？私たちは神に喜んでいただくためにすべてのことをしているのでしょうか？ユダヤ人たちはいのちがけで律法を守ろうとしました。私たち信仰者もいのちがけで神を愛して、神に従って行くはずではありませんか？ I コリント 3 章では、パウロは私たちいろいろな家の話をしてくれます。ある人たちは金や銀や宝石で家を建てるけれど、ある人たちは木や草やわらで家を建てます。これらはみな救われている人たちのことです。ある人々はここにあるように木や草やわらで家を建てています。つまり、一生懸命やっているかも知れないけれど、それは神のみこころに沿っていないのです。自分のために自分の力でやっているのです。その信仰は空しいのです。

なぜなら、神の前に立つときにすべて燃えてしまって何も残らないのです。私たちはユダヤ人を指さして「彼らは知識に基づいていなかった。」と、果たして、そのように言えるのでしょうか？ 私たちも知識に基づいていないかも知れません。信仰者として、救われて喜んでいるかもしれないけれど、私たちの歩みがみこころに立った歩みをしているかどうかです。さばき主の前に立つときに、あなたのその信仰者としての人生を神が吟味なさるときに、神が誉めてくださるようなことが残りますか？過去のことはもうどうでもいいのです。問題は今であり、これからです。今、どのように生きるかであり、これからどのように生きるかです。

もし、私たちにこの熱心が欠けているなら、今一度思い出さなければいけません。神が望んでおられることは「知識に基づいた熱心さ」と思いませんか？しっかりとみことばに立った熱心さ、そういう信仰者を神は望んでいると思いませんか？問題は、あなたがそういう信仰者であるかどうかです。しっかりと主を見上げなければいけないのです。神のなさったすばらしい救いを覚えなければいけないのです。その主に対して私たちがどのように応答して行くのか？信仰者の皆さん、まだまだすることが残っています。まだまだ伝えなければいけない人々がこの世に溢れています。それをやるかどうかはあなたの責任です。

「熱心であれ！」とそのことを考えてしまいます。自分自身ももっと熱心に、もっと多くの人々と、そのようにして人生を終わりたいと思いませんか？神の恵みを覚えつつ、その恵みを与えられた者として相応しく生きて行くこと、それが私たちの務めです。信仰者の皆さん、熱心でありましょう。しっかりした知識に基づいて、熱心に主に従い続けて行きましょう。

《考えましょう》

- ・全知なる神の目に、あなたはどのように映っていると思いませんか？
- ・あなたの行なうどのような善行に対しても、神が「不完全」だと言われるのはどうしてでしょう？
- ・では、救いはどのようにして得ることができるのでしょうか？